

Title	東洋古代史(橋本増吉著, 平凡社刊行)
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.169- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論及してゐる。

これを要するに、義疏を通じて、吾等は太子の全人格を最もよく了解し得ると共に、奈良朝以前の日本の精神文化、並に、その後の國民思想、及びわが佛教發達の動向を最も明かにし得るやうに思ふ。この意味に於て、本書は、各編共に、實に貴重なる研究であつて、これによつて、一般學者のみならず、一般國民が、多大の裨益を得ることを、確信するものである。終りに臨んで、著者に謹んで敬意を表すると共に、尙ほ將來に於て、太子の二經の義疏に關する研究をも、成就されんことを希望する。(一九三四、一月三十日、山本光郎)

東洋古代史

(橋本增吉著
平凡社刊行)

本來、東洋史なるものは西洋史に對立し、世界史の一部として敘説すべきものであり、決して我が國史の對照たるべき性質のもので無いとは橋本先生年來の所説である。長年の間、克明な努力を以て書き綴られた先生の東洋史概説が先年漸く上梓されて世に出た時(東洋史講座)、これに對して非常な喜びを感じたものは決して少く無かつたであらう。その後數年の間、東洋史の研究は殷墟、モヘンジョ・ダロの發掘調査等もあり、各方面に互つて著しき進歩を遂げたのであつて、先生もその舊稿に加筆訂正の機會を切望されてゐたのであつた。會々平凡社の世界歴史大系に執筆を依頼せられて本書の誕生を見るに至つたことは獨り先生のみならず、廣く同學諸氏の喜びとさるる所であらう。

先生はその序に忽卒の間に稿を成し、成るに應じて版に附し殆んど全く推敲の餘地が無かつたと述べられてゐるが、單にその目次を辿つて見ても日常の蘊蓄が窺はれ、その努力の結晶たることに首肯せぬものは無いであらう。

先生は先づその序言を草するにあたり「歴史と人生」なる一節に筆を起し、現實に即した一歴史家としての態度を鮮明にされ、次いで世界史の動向を語り、進んで東洋史の意義及び内容を述べ、更に東洋史の研究に缺くべからざる亞細亞の地理及び民族の智識を詳細に説明されてゐる。最後に西曆紀年法を採用した理由を物語つて居られるが、先生の學究的態度に於ける如何にも丁寧な一端を其處に窺ふことが出來よう。

第一章、東洋文明の起源に於ては東洋文明の起源と特性とを明かにし、これを西洋文明と比較對照させ、更に進んで全人類の立場から世界文明の完成を説かれてゐる。先生の眞面目の片鱗を最もよく見ることが出来るのは第二章、支那文明の發達であらう。西歐人の支那研究がややもすれば型式の類似に誤まられて、史料の精査批判を忘るる短所あるを排し、あくまで精密な考證に基づく研究を強調されてゐる。第三章、印度文明の發達は佛教の誕生に筆を起し、次いで支那に於ける儒教が漢室によれると同じく、印度に於ける佛教も摩揭陀國摩利耶王朝の威力によつてその精神的大統一の機運を醸出した事情がつぶさに記されてゐる。第四章、亞細亞南北兩系統民族の抗爭に於ては先づ匈奴の興盛に伴ふ月氏の南下を記し、匈奴と漢武の争鬪から西域との交通が開け、漢は東朝鮮、南諸蠻をも併せるに及んで國威盛大を極はめ、然も内實

は外征に伴ふ疲弊甚しく、他方匈奴は衰運を辿るの梗概を記述されてゐる。更に王莽の變を経て漢室の再興に及ぶ。第五章、佛教東傳の初期に於ては大月氏國で發達成熟せる佛教が東漸せる経路に就ての考證を述べ、古代西域文化の概要が紹介され、當時の支那に於ける社會的動搖に及んで擱筆されてゐる。

卷末に地圖を附するもの四、無数の挿繪と共に讀者の理解を一層深めることであらう。

こは提要にあらず、史論にあらず、實に概説の書、即ち先生の東洋古代史を最もよく短的に表現せる一書である。好著惜しむらくは誤植、脱漏多く、殊に四九八—四九九の間の二頁を落す等甚だしきものである。幸ひ史學の本號に正誤表を掲げ、その短を補はれるさうで誠に喜ぶべき事である。(近山金次)

新羅史研究

(今西龍遺著
近澤書店刊行)

本書は朝鮮史を専攻せられた、故今西龍博士の遺著の第一冊として出版されたもので、これには博士が朝鮮史研究に進まれたその出發點が新羅の舊都慶州の探訪にあつて、新羅に關する研究が博士の朝鮮史に對する研究の基礎となつたと考へられるといふ内面的な意義が附與せられてゐる。

本書の内容は先づ最初に總論としての新羅史通説を載せ次に新羅研究の最初の報告としての新羅舊都慶州の調査記を掲げ以下官職制度、傳説、金石文、古文書、遺蹟遺物に關する研究を順次に收めてゐる。

卷頭論文たる「新羅史通説」は京都帝國大學文科大學に於ける二つの講義案を合せ録したもので、獨立の論文でないため多少缺點もある様であるが、新羅史の通説としてはこれ程よくまとまつたものは從來出てゐない。貴重な文獻といふに憚らない。

本論文は先づ新羅本源地の地勢から始まつて、その建國、建國傳説を敘し、それに關聯してその階級と官位とを述べ、次に、第一に原始的國家が發展すべき地理上の好位置に在り、第二貴族政治にして、交代して王となるの特殊の制度あり、第三に血の混ぜし結果強健なる民族となつた新羅の興起を説き、更にその中代、下代に及び、その間の外國關係特に、我國との交通を力説し、最後に新羅王朝と日本との交通が世に想像さるゝよりも頻繁なりしこと、國際交通の外に商賈の貿易の盛んなりしこと(但し新羅より我國に來りしが如し)に注目し、此時代唐の貨物文化にして新羅を経て日本に入りしもの、唐より直接に入りしものに比して甚だ多かりしが如し、と結んでをられる。

要するに、本書は一貫した新羅史の著述ではないから、多少の重複、前後の矛盾、は己むを得ないこととして、朝鮮史學研究の指導標としての本書の價値は、博士今西の名と共に永久に失はれるものではない。

博士の遺業が、これより逐次刊行せられて八冊の朝鮮史大系となることを期待して止まない。(本文五九五頁、定價金五圓 淺子勝二郎)